心臓移植市民公開講座　「大切な人のために、今知っておきたい最新医療 ～補助人工心臓と心臓移植～」

「命」受け継ぐ心臓移植

もし、家族や友人が重い心臓の病気だったら、私たちはどうしたら、その大切な人を守ることができるのだろうか。脳死となった方から心臓の提供を受け、心臓病患者に移植する「心臓移植」は、重い心臓病を克服する極めて有効な治療法の一つだ。そんな心臓移植や臓器提供への理解を深めてもらおうと、日本循環器学会と日本心不全学会は6月21日、東京都文京区の東京医科歯科大M&Dタワー鈴木章夫記念講堂で、「大切な人のために、今知っておきたい最新医療～補助人工心臓と心臓移植～」と題した市民公開講座を開いた。3部構成で行われた講座には約400人が来場、専門家による解説や、心臓移植を待つ患者、心臓移植を受け、元気に社会で暮らす人々らの声に耳を傾けた。

第1部

第1部では、臓器移植の基本的知識や現状を理解してもらうため、医師や小児渡航心臓移植体験者が、それぞれの立場で「心臓移植」について語った。

磯部光章氏

磯部氏（趣旨説明）　心臓移植は普通の医療とは違い、お亡くなりになった方から貴重な心臓を提供していただき、必要な方に差し上げて治療していく医療。社会が大きく関わる点で他と異なる。昨年、心臓移植を受けた方は37人。一方、移植登録して待機している方は314人。10倍の方々が待っており、その点を大変憂慮している。少しでも移植を受けられる方が増えていただきたいという思いで、この講座を企画した。心臓移植をまず理解し、ご自身の命、周りの方の命の大切さに改めて気付いてもらえればうれしい。

樋口氏　1991年7月3日に生まれ、生後半年で心筋症の診断を受けた。治すには心臓移植しかないが、当時は日本では行っていないと告げられた。主治医の尽力により短期間で渡米が実現、ちょうど1歳の時に米国で心臓移植を受けた。

子供のころは心臓移植をしたことを知らずに生活していた。事実を知ったのは6歳の時。同級生に「なぜ胸に傷があるのか」と聞かれたのがきっかけだったが、当時の私には心臓移植が理解できなかった。

中学生になり、理解できるようになったことで「なぜ、自分は助かったのだろう」と考え始めた。悩みは誰にも相談できず胸にしまい込んだ。ドナーや、両親、周囲の人々には感謝しきれない思いがあったが、「みんなのおかげで助かったのだから、恥ずかしくない人生を精いっぱい感謝しながら生きなさい」と言われることは重く感じていた。

自分を救ってくれたのは「移植していても、していなくても、樋口は樋口だろ」という高校時代の友人の言葉。自分らしく生きていこうと思えるようになった。病院などで移植を受けた子供たちや親の相談を受けるようになり、今は、相談を受けるために自分は生かされたのではと思う。

今年から社会人になった。移植を必要としている子供たちが笑顔で暮らせるようになることを心から願っており、お手伝いできることがあればうれしい。

布田氏　樋口君の主治医として、時に父親的だったり、時に学校の先生だったりしてきた22年間だった。これからもずっと寄り添いたい。

心臓移植は実験が行われたのが今から100年以上前で、初めて人に心臓が移植されたのが1967年。体の異物を排除しようとする拒絶反応をどう発見し、抑えるかが課題だったが、1980年代に有効な免疫抑制薬が開発されて成績が向上、90年代には世界で4500例ぐらい行われるようになった。

移植後生存率は世界で年々上昇しているが、中でも日本の生存率は極めていい。1999年に日本で臓器移植法施行後初の心臓移植が行われてから昨年末までの心臓移植後の累積生存率は、国際心肺移植学会による世界の統計が36％に対し、国内は78％だ。

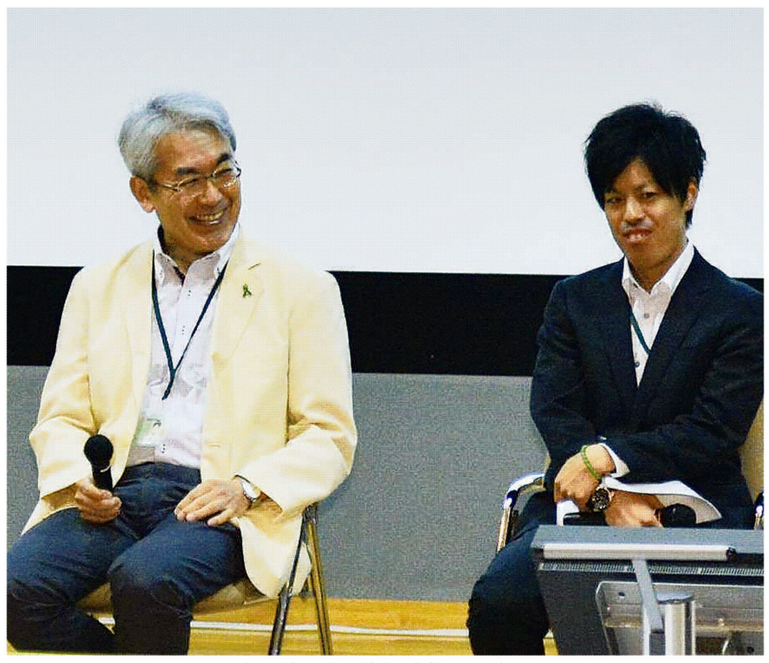
ただ、この間に国内で行われた心臓移植は185例。2010年の法改正で脳死下の臓器提供が家族の同意で可能となり、15歳未満からの提供も可能になったが、それでも年間40例以下だ。補助人工心臓の進歩などで、心臓移植の希望登録者が増加した結果、法改正前後で心臓移植の待機日数はほとんど変わらない。

人口100万人当たりの年間の心臓提供者数は、オーストリア8・6人、米国7・3人、台湾3・7人、韓国1・3人に対し、日本は0・37人（法改正後）と極めて低い状況にある。

◇

最後に、国内で臓器提供者となった男性の妻と娘からのビデオレターが紹介された。

体験者の樋口浩介氏「移植待つ子供を支えたい」


布田伸一氏（左）と樋口浩介氏

登壇者

【第1部】磯部光章氏（東京医科歯科大学大学院循環制御内科学教授）、樋口浩介氏（小児渡航心臓移植体験者）、布田伸一氏（東京女子医科大学大学院重症心不全制御学教授）

【第2部】小野稔氏（東京大学大学院医学系研究科心臓外科教授）、山中源治氏（東京女子医科大学病院補助人工心臓管理看護師）、遠藤美代子氏（東京大学医学部附属病院レシピエントコーディネーター）、加藤伸氏（植え込み型補助人工心臓装着者）、矢作綾平氏（植え込み型補助人工心臓装着者）

【第3部】佐藤秀峰氏（漫画家）、清水理恵氏（心臓移植体験者）、清水一男氏（清水理恵氏夫）、田中真弓氏（声優）

【総合司会】雁瀬美佐氏（日本臓器移植ネットワーク事業推進部長）

第2部

移植への道支える補助人工心臓

左から遠藤美代子氏、矢作綾平氏、加藤伸氏、山中源治氏、小野稔氏、雁瀬美佐氏

第2部では、患者が心臓移植を待つ間、低下した心機能を補う補助人工心臓について、専門家や実際に装着している方々から話があった。

補助人工心臓　機能が低下した心臓の代わりに血液循環のポンプ機能を補う医療機器。以前は体に小型冷蔵庫ほどの機器をつなぐ「体外設置型」が使用されていたが、平成23年にポンプを体内に設置する「植え込み型」が保険適用された。植え込み型は一般的に、①左心室から血液を抜き取る②体内に設置されたポンプへ血液を流す③ポンプ内の羽根車やらせん状の軸が高速回転することで血流を生み出す④その勢いで大動脈を通じて全身に血液が送り出される―という仕組み。現在は4機種が保険適用されている。

小野氏　補助人工心臓には、体の外に補助するポンプを置く「体外設置型」と、体の中に補助するポンプを埋め込む「体内植え込み型」があり、在宅待機や社会復帰も可能な植え込み型については現在4機種が保険適用されている。補助人工心臓の装着には①心臓移植への橋渡し②自己心機能の回復③重症心不全患者の救命④永久植え込み治療―という4つの目的があるが、④を目的とした装着は日本では未承認だ。

山中氏　心臓移植を待機している重症心不全患者の8～9割が補助人工心臓を装着する。装着後の患者は徐々に体力を回復し、社会復帰も可能だが、1年で約半数が脳血管障害や感染症など何らかの合併症を経験する。

退院後の機器管理は患者や家族が行い、心不全の管理や体調管理も継続する必要がある。移植までの長い道のりを、患者、家族、医療者はタッグを組んで一緒に歩んでいくことになる。

遠藤氏　現在の心臓移植までの待機日数は約3年。多くの方が補助人工心臓をつけて生活することになる。その間、気持ちが落ち込むことがあるので、QOL（生活の質）を高めるためにもリフレッシュケアが大事。患者の家族の支えが重要だ。

◇

続いて植え込み型補助人工心臓を装着しながら移植を待つ会社員の加藤伸さん(23)と、大学生の矢作綾平さん(19)が登壇、3人とともに、自らの思いを語った。

雁瀬　補助人工心臓の装着前後で違いは？

加藤氏　体調的にはとてもいいので、静かにしている分には違いはないが、通院や再入院も多いので、会社の人の目を気にしてしまい、今まで通りの社会生活を送れているわけではないことを実感している。

矢作氏　大学1年の5月に装着したが、装着しなければいけないと言われた時は、悲しいというより、まだ生きることができるんだと思った。植え込む前は体がつらくて50㍍も歩けなかったが、今は基本的に不自由なく人並みのことができるようになった。

雁瀬　補助人工心臓で気をつけることは？

遠藤氏　生活には介護者が必要。常にバッテリーやコントローラーを持ち歩かなければならないところも負担になる。

小野氏　最近は小さく性能のよい補助人工心臓が開発されているが、やはり合併症は起こる。体の小さい子供に使用できる機器はまだ承認されていないので、早く使うことができるように努力している。

第3部

「前を向いて負けないで頑張って」

雁瀬美佐氏

佐藤秀峰氏

清水理恵氏

清水一男氏

田中真弓氏

第3部では、移植医療を扱った漫画「新ブラックジャックによろしく」の著者で漫画家の佐藤秀峰氏(40)や、臓器移植を体験した患者、その家族らとともに、大切な人のため、今、私たちに何ができるのかなどを話し合った。

◇

雁瀬氏　「新ブラックジャックによろしく」で印象的だった取材は？

佐藤氏　救急医療の現場では脳死状態の患者さんがいらっしゃって、すぐ横にお母さんらしき方が座り、手をずっと握っていること。

雁瀬氏　臓器移植に対する考えは？

佐藤氏　最初は意思表示カード（の提供欄）に全部○をつけたが、取材をしているうち、よく分からなくなり、今は提供しないに○をしている。ただ、来年は違っているかも。気持ちは変わるかもしれないけど、何も考えないと思い出さなくなる。考え続けることがいいのかな。

◇

続いて、拡張型心筋症を患い、心臓移植を受けた清水理恵さん(45)と夫の一男さん(45)が加わり、それぞれの体験を語った。

雁瀬氏　病気を診断されたときの気持ちは？

理恵氏　インターネットですぐ分かるので見たが、怖くなってすぐ閉じた。拡張型心筋症―つまり、難しい。

雁瀬氏　読者に伝えたかったことは？

佐藤氏　こうしてほしいというのはないが「いろいろなことを聞いてきたので、こういうふうに並べてみました。どう感じるか一緒に考えませんか」ということ。

雁瀬氏　補助人工心臓をつけて頑張っていただきたい。

理恵氏　2年ちょっと。

雁瀬氏　長期にわたる妻の闘病生活で、夫として一番気を使ったことは？

一男氏　移植して健常者と声優の田中真弓さんとともに、

◇

その後、アニメ「ONE PIECE」の主人公、モンキー・D・ルフィ役などで知られる声優の田中真弓さんとともに、臓器提供の意思表示に関するクイズを実施。最後に田中さんが心臓移植を受けた20代の女性が書いた「サンクスレター」を朗読すると、会場は温かい拍手に包まれた。

「今日から使える、意思表示クイズ」の一部

Q1 臓器提供する意思表示ができる年齢は？
①6歳以上　②15歳以上
③20歳以上
A＝②（遺言可能年齢に準じています。提供しない意思の表示に年齢制限はありません）

Q2 意思表示できる上限の年齢は？
①50歳まで　②　70歳まで
③制限なし
A＝③（移植の可否は、実際の臓器提供時に医学的検査をして判断します）

Q3 意思を表示したら変更できないの？
①変更できる
②変更できない
A＝①（自分のカードなどに記した意思を書き直すことが可能です）

Q4 意思表示は誰のためにするの？
①移植を待つ人のため
②家族のため
③自分自身のため
A＝①②③（もしもの時に意思が分からないと、家族が迷ってしまいますし、提供したい、したくないという自分の気持ちがかなえられない可能性もあります。一方で、提供意思が分かれば、移植を待つ人のためにもなります）

《企画・制作》産経新聞社生活情報センター

主催：一般社団法人日本循環器学会、日本心不全学会　特別協賛：ニプロ株式会社　協賛：大塚製薬株式会社